

歴史探訪第19回例会は薬師寺で行なわれましたまほろば塾を例会として参加しました。  
参加者は15名でした。議事録は下記……作者は重野忠史さん

## 薬師寺21世紀まほろば塾 平成22年1月例会 議事録 ( 第十九回シャープ歴史探訪会の会 )

日時:平成22年1月17日(日)13時30分～15時50分  
場所:薬師寺・まほろば会館

- I. 開催挨拶 大谷徹英執事 まほろば塾入会の案内  
東塔修復と写経の要請
- II. 年頭ご挨拶 安田映胤長老

花山院氏が本日講演する神仏習合のについて、古来日本では、明治初頭の廃仏毀釈までは、神と仏は大変仲が良かった。現在、「神仏霊場会」などで、再び古来からの良き伝統を甦らせようと、東大寺、春日大社、伊勢神宮など多くの寺社が参加して活動を始めている。特に、春日大社は、おん祭りなどを含め、奈良文化の中心なので宮司の活動に期待している。

- III. 講演「春日の信仰」 春日大社宮司 花山院 弘匡宮司

### 【 花山院 弘匡宮司の略歴、家柄 】

昭和37年佐賀県生。昭和61年3月国学院大学卒業後、奈良県下の幾多の高校教諭勤務

平成20年4月 春日大社宮司(世襲ではない)となる。  
(公家)花山院家第33代目にあたる。藤原道長の孫の  
関白師実(もろざね)の次男家忠が

花山院家の祖であり、京都宗像神社にが花山天皇から  
下賜いただいた家がある。

父は春日大社元宮司(22年間)の花山院親忠氏、  
叔母は尼僧であった。



講演者花山院弘匡氏

### 1. 近況報告

- ①年末の若宮おん祭り:0泊2日の神の旅(12月17日0時～12月17日深夜24時)は、本来は旧暦で月の明かりの無い新月の暗闇に遷幸・還幸された。神は畏れ多い存在であった。
- ②年末から新年の行事:大払い→除夜祭→大寒祭→興福寺の僧の初詣と多忙であった。
- ③奈良の場合は、地理的に興福寺、東大寺、そして一番奥が春日大社と寺社の区分はわかり易いはずであるが、白衣の袴を着けていると、若い人から興福寺の宝物殿や東大寺の戒壇院などのへの道を尋ねられたりする。神仏習合というより、神仏区別がつかないと思う。興福寺と春日大社の境は、一の鳥居(すぐ近くには影響の松がある)である。  
木や花の名前を聞かれて、わからなくて、もっと勉強しておくように檄を受けたこともある。  
又、鹿に襲われて怪我をしたとのクレームを受けることがある。鹿に襲われるのは、人道りと煎餅屋さんの多い場所で、他の鹿を押しつけて、餌さの煎餅を独占できる強くて悪い鹿である。
- ④祖先である、藤原不比等は、白村江の戦いで破れて不安定な時期に大宝律令や和銅開珎をつくり、律令による法治国家と貨幣経済の構築をめざしたことなどを評価している。
- ⑤ 昨年12月初め、陛下にお会いする機会があり、平城遷都1300年祭りの話が出て、陛下より平城京に比べ、京都の平安京や、さらに本家の、中国長安(西安)の都は風化してしまい、残っているものが少ないのに、奈良には、往時を感じさせられるところが、多く残っているとのお話があった。古代、天平のロマン、心の豊かさを奈良の誇りにして、これからも、平城京の護り神としての春日神社にしていきたい。

### 3. 神仏習合について

- ①日本は古代から豊かさが連続的に続き、進展してきた。その源泉となる自然に対する感謝と畏怖が八百万の神を生んできた。天照大神(太陽)、武甕槌神(雷)等々  
人知を越えた先は、運命を委ねる、八百万の神の存在に寛容であった。
- ②比較論で言えば、西欧では、ひとつのすばらしい神を信じ、それ以外の神に排他的であった。  
豊かさも、産業革命以降急激に進展した。

- ③日本は、古代の仏教の伝来を含め、近世に於ける朝廷と幕府、尊皇攘夷、近代の洋服採用、戦後の民主主義の受入など、色々な考え方や文化を受け入れる包容力、寛容性があった。
- ④神と仏も心の問題として、事挙げや説法により、受け入れられてきた。
- ⑤平安時代以降、仏様が神様の姿で現れるという、本地垂迹の考え方が出てきた。

春日大社の例:	神	本地	
第一殿:	武甕槌命	不空絹索観音	釈迦如来
第二殿:	経津主命	薬師如来	弥勒菩薩
第三殿:	天児屋根命	地藏菩薩	
第四殿:	比売神(天照大神)	十一面観音	救世観音、大日如来
若宮	天押雲根命	文殊菩薩	十一面観音、聖観音

⑥春日大社の神は、中世以降、法相宗を守護する神ともなり、現在もその法要が続いている。法相宗の高僧慈恩大師の忌日の法要(慈恩会)は、薬師寺でも、ほぼ同様の法要がなされる。これも、神仏習合の一例である。

⑦配布資料「春日権現験記」に見る神仏習合

序: 第一殿～第四殿の神と仏の習合の記述

話1第五巻:(上段)藤原俊盛の没落と(下段)春日詣後の繁栄の比較

話1第五巻:(上段)藤原俊盛春日詣後の繁栄の自宅:子供の昼寝、盆栽や薔薇の木、鷹狩場

話1第五巻:(上段)藤原俊盛春日詣時に、雷雨の中で神が現れ、仏門に入ることを勧める。

話1第五巻:(下段)藤原俊盛3年後の極楽往生時、春日社上空に紫雲たなびく。

話3第六巻:(上段)春日六道で邪道に落ちた児を救う為、関係者がお祈りをしている。

犬や猫が見える。

話4第七巻:(下段)一度邪道に落ちたても、信仰すれば、又、女性でも極楽往生できることを三途の川の前の方輪塔を載せた卒塔婆で示す。

⑧ 春日大社の鳥瞰図に見られる神仏習合:

- イ. 旬祭の八足案(神饌を盛る置台)が見られる。  
旬祭は現在でも、1の付く日(31を除く)に行われる、
- ロ. 僧侶(黒い法衣)のお参りの姿が見られる。
- ハ. じんぐうじが描かれ、その前で禰宜さんが、縁者に神垂の付いた御幣を差し出している。花山院氏が現物持参し、お見せいただいた。



縁者に神垂の付いた御幣

IV. 安田映胤長老「平山郁夫先生と玄奘三蔵院の思い出」

別紙B4資料一枚



塾長安田映胤長老

資料に基づき、平山画伯の生い立ちと出会い、壁画の完成までの経過、エピソードを紹介いただく。以下、資料プラスアルファのことのみ記載

- ①画伯は15歳で、広島に勤労働員に行き、原爆投下時に、三つの落下傘を見て、不思議なものを友達に教えるべく、作業場に走って行って、その一秒後、作業場内で被爆。水も飲まず24時間走って逃げて助かった。まさに運命的な生き残りであったが、放射能の後遺症は残った。

- ②玄奘三蔵の追体験のスケッチ4千点から七場面の壁画を選定。何処に描くかをめぐって、西塔から玄奘三蔵院に変更。  
西塔の再建には、反対も多く、薬師寺も大変悩んだ。(当時の文化庁長官の三浦朱門氏談:「奈良で新しい建物は天理教だけでいい」)  
来日したアンドレマルロー氏の意見:昔あったんだから建てた方が良く。  
最近参観の五木博之氏談:西塔のほうが美しい。「建築は作られた時の美を見てもらうの権利がある」
- ③平山画伯は、壁画を単なる絵ではなく、絵身舍利として取り組み、中国からの群青絵の具の調達、取材旅行時の1トンにもなる荷物の手配など、すべて自費であった。
- ④平山画伯は、尊敬する高田管長に生前中に壁画を見てもらいたかったが、それがかなわぬことを知り最後の壁画「ナーランダの月」の中に高田管長の姿を入れている。  
高田管長は、納期について、決して催促することなく、壁画を見ることなく亡くなった。
- ⑤平山画伯が、絵という文化を通して、精神的な面で、平和を構築することに邁進された、その意思を継承していきたい。



熱心に受講される会員



春日権現験記

夫春日大明神、満月圓明の如來、久遠成道のひかりをやはらげ、法華等經の奥に、内証本地の影をかきす。尊一初之鬼神として鎮小西衆の安寧を傳ふ給天津辰天皇より、是て尊辰中國へ入給し將邪神々せきたてまつりしに、天より寶劍を授けしを誦大妹命事代主命天照大神を以てゆかしてははらひ、陸津主尊、武甕槌尊等、遠討使として兩神さりと時、國をおさむるを奉る。天岩戸を、しひらきては、六合のごこやみをしてらして、万民のうれへをやすめ給。すなはて天照大神、兒屋根尊合休御祭ふかくして、伊勢大神宮もおなじく第四御殿にあとをたれたまふ。これによりて、御靈瀧河の流、千秋のかけをうかべて九五の位おたやかに、御笠山の氣、萬歲の名をよびひて博陸のよせおもし。その源をたづねば、むかし我朝思鬼邪神あけられた、かひて、都都やすからざりしかば、武甕槌の命をあらはれて、陸奥國塩竈浦にあまくたり給。邪神靈威におそれたてまつりて、成はにげさり、成はしたがひたてまつる。その、ち、常陸國鹿の社より鹿島にうつらせ給。つみに神護堂二年春、法相攝護のために御笠山にうつり給て、三性五重の春の花をもてあそび、八門二倍の秋月をあざけりたまふ。「秋津洲の中、山野おほければ、月光も三笠山にしかず、花の匂も春日野に漂たるはなし。この花月をもてあそび給へ」と香取・平河の兩神に申されしかば、おなじじの冬、影射し給てよりこのかた、靈融りし是利益日あらたなり。しかれば、いにしへより今にいたるまで、しるしをき見をよぶごころ、前後をたゞさず、御後書にあらはして、路中舟とすはえんごころ。

【序】

夫、春日大明神は、満月圓明の如來、久遠成道のひかりをやはらげ、法華等經の奥に、内証本地の影をかきす。尊一初之鬼神として鎮小西衆の安寧をまもり給。天津辰天皇はじめて尊辰中國に入給し時、邪神々せきたてまつりしかば、天より宝劍を授けてこれを誦。大妹命、事代主命、天照大神を以てゆかしてははらひ、陸津主尊、武甕槌尊等、遠討使として兩神さりと時、國をおさむるを奉る。天岩戸を、しひらきては、六合のごこやみをしてらして、万民のうれへをやすめ給。すなはて天照大神、兒屋根尊合休御祭ふかくして、伊勢大神宮もおなじく第四御殿にあとをたれたまふ。これによりて、御靈瀧河の流、千秋のかけをうかべて九五の位おたやかに、御笠山の氣、萬歲の名をよびひて博陸のよせおもし。その源をたづねば、むかし我朝思鬼邪神あけられた、かひて、都都やすからざりしかば、武甕槌の命をあらはれて、陸奥國塩竈浦にあまくたり給。邪神靈威におそれたてまつりて、成はにげさり、成はしたがひたてまつる。その、ち、常陸國鹿の社より鹿島にうつらせ給。つみに神護堂二年春、法相攝護のために御笠山にうつり給て、三性五重の春の花をもてあそび、八門二倍の秋月をあざけりたまふ。「秋津洲の中、山野おほければ、月光も三笠山にしかず、花の匂も春日野に漂たるはなし。この花月をもてあそび給へ」と香取・平河の兩神に申されしかば、おなじじの冬、影射し給てよりこのかた、靈融りし是利益日あらたなり。しかれば、いにしへより今にいたるまで、しるしをき見をよぶごころ、前後をたゞさず、御後書にあらはして、路中舟とすはえんごころ。

話1第五卷



話1第五卷







平山郁夫先生と玄奘三蔵院の想い出

平成二十二年一月 薬師寺長老 安田映胤

庚は(一)継承・継続、(二)償う、(三)更新を意味する。寅の字の真ん中は、手を合わせる、約束する象形文字、下の八は人。「つつしむ・たすける」の意がある。寅は寅に通じ、進展を意味する。つつしんで協力することを寅亮ともいう。寅寅とは同僚のこと。

前年からのものを断絶することなく継続して、いろいろの罪・汚れを払い浄めて償うとともに、思い切つて更新していかねばならない。そのためには心を引き締め、つつしみ、同志・同僚相たすけ、協力して仕事に当たるようにすること。

革命にもついでに、進化にもついでに。  
平山郁夫画伯(一九三〇年六月十五日〜二〇〇九年十二月二日)  
幼い頃から絵が好きであった。  
十五歳の時、広島原爆に遭遇す。その後遺症として肉体的苦痛に時折襲われた。

二十九歳で、「仏教伝来」が院展に入選

法隆寺金堂の壁画復元模写に参加 一人で一壁面を担当する

尊父の峰市翁が背後で念仏を称える 信仰心の篤い人

肉体的に苦しい環境の中でスケッチをする時に、念仏を称えながら描く

平山先生との出会い 安田鞠彦先生の紹介 薬師寺金堂天井絵の原画依頼 続いて薬師如来

昭和四十四年 安田鞠彦先生の紹介 薬師寺金堂天井絵の原画依頼 続いて薬師如来

の天蓋の原画を依頼 (法隆寺金堂の壁画模写の努力を評価された)

昭和四十六年 埼玉県岩槻の慈恩寺に玄奘三蔵の頂骨の分骨を打診

玄奘三蔵の分骨により、高田好胤管長西塔復興を決断

昭和四十九年 玄奘三蔵顕彰の壁画を西塔の中に描くことを依頼

昭和五十一年 最初の設計図が出来た。一面七mの八角堂に七壁面、四十九m、

絵物語りに表現するのではなく、玄奘三蔵の追体験をし、玄奘三蔵の気持ち

を実感したい。四千点のスケッチから七場面を選ぶ

一、明け行く長安大雁塔 二、高昌故城

四、西方浄土 須弥山 五、パミリアン石窟 六、デカン高原の夕べ

七、ナールンダの月(高田管長の人物像)

天井画は千三百年前の星屋、照明は自然光、床はタクラマカン沙漠を希望

頂骨は真身舍利 壁画は絵身舍利として祀る

薬師寺は建物で顕彰 平山画伯は壁画で顕彰 共に施主

絵所(アトリエ)開きに吉祥天女画像を揮毫し祀る

薬師寺の十三重塔を解体して分骨 先生ご夫妻も同行

建設場所と基本設計決まらず空白期間が続く。

その間、玄奘三蔵の道の追体験を重ね構想を練られる。

昭和五十五年 玄奘三蔵院建築許可を得て、起工式を厳修。平成三年、玄奘三蔵院落慶

壁画完成まで禁酒を實踐

平成十二(二〇〇〇)年十二月三十一日十一時五十九分五十九秒 大唐西域壁画完成

昭和五十三年 西塔の基礎に仏舍利を奉納 石製舍利容器、銀の傘蓋、伏鉢塔形の純金の

容器、金箔の花形、舍利、金銀箔の花形が数十枚、金製垂飾、珊瑚玉、瑠

璃玉、ガラス玉、真珠、ラピスラズリなど納入

被曝体験から平和構築の思いが熱く、平和と文化を守る活動に専念

先生の悲願